

「助産外来」開設！！

4階東病棟 寺本 りか

ここ数年産婦人科医の減少や地域による偏在が著明となり、周産期医療システムの再編成が求められています。そのための方法の一つとして、助産師外来・院内助産の開設、拡充が推奨され助産師への期待も大きくなっています。助産師外来とは助産師が医師と役割分担し、自立して妊産婦やその家族の意向を尊重しながら健康診査や保健指導を行うことです。

名称は施設によって異なりますが、私達は「助産外来」と名付け、4月よりスタートします。

実施場所は産婦人科外来(現在のマタニティルーム)、実施日は月～金曜日9時～15時まで(予約制)、健診時間は30分/名で、助産外来担当者は経験年数3年以上で外来での保健指導担当している者としていきます。助産外来の対象者は26, 34, 37～39週で医師が許可した妊婦(合併症がなく妊娠経過に異常がない)とし、妊婦健診中に正常範囲を逸脱する可能性がある場合、もしくは逸脱していることを助産診断した場合は、速やかに医師に診察を依頼するなど医師と連携しながら行います。

助産外来の効果として――

1. 個別の対応時間を確保することで対象者との信頼関係が築け、満足度の高い妊娠・出産・育児体験が提供できる。(患者サービスの向上、患者満足度の向上)
2. 待ち時間の短縮が図れる。
3. 医師と役割分担することで医師の外来業務を軽減する。(産科医減少に対応)
4. 助産診断能力と技術の向上
5. 対象の満足度が上がることにより、助産師のモチベーションの向上につながる。

などがあげられます。

助産師外来開設のポスター

助産師外来開設のご案内

4月より助産師外来がスタートします。

月～金 AM9:00～12:00, PM14:00～15:00です。

1. 助産師外来とは?

助産師が行う妊婦健診です。内容は医師の診察と同じです。完全予約制で、必要な保健指導も合わせて行います。聞きたいこと、不安なことなんでもゆっくりとお話ができます。

2. 受診できる方

妊娠26週、34週、37週～39週の妊婦さん(帝王切開、子宮の手術の既往のない方)です。

妊娠経過に異常がなく医師が許可している妊婦さんが対象となります。詳しくは、医師の健診時に気軽にご相談ください。

3. 担当助産師は?

病棟で日々実際に分娩や帝王切開に立ち会い、育児指導をしている助産師が担当します。

☆あなたの妊娠・分娩・楽しい育児を心よりサポートいたします☆



オアシス



病院長
山本 忠生

人工臓器、再生医療などの最先端の医薬品や医療機器は、目の前の患者さんに使用してはじめて役に立つ。今まで不可能であった治療が医療として定着すればすばらしい成果となる。最先端の治療をいち早く国民に還元しようと、医学研究者は努力している。国は医療イノベーションに力を入れ、国家戦略として取り組もうとしている。一方、国民は医療や医学には科学の裏付けがあると思っているがそうでないことも多い。

医療の発達は、時に薬害などの間違いも引き起こしてきた。逆に医療として使うには無意味なものと思われていたことが、後に重大な意味を持つこともあ

る。最先端の医療技術がそのまま幸せな未来に繋がるとは限らず、新しい技術の持つ価値は長い時間を経て決まることもある。

もっと元気になりたい、もっと長生きしたい、どこかにもっと良い治療法があるのでは、と誰もが思う。しかし永遠の命を手にした人は誰もいないことも知っている。心の底で、本当に求めているのは生きていく時間よりも過ごしている時間の中身である。それは、良く生きたい、人間らしく生きたい、自由に生きたいということであり、自分が他人の役に立っている、ということ意識できることである。

「安心するから」と病院の近くに引越した患者さんがいる。何度も検査を受けて、どこにも悪いところはないと云われているが、時々不安になり、病院の待合室に行く。目の前を行きかう看護師さんの姿を見ていると次第に気持ちが落ち着いてくるという。病人は、病気の痛みや苦しみのほかに、金銭的な問題、死への恐怖、社会生活を保てなくなる不安など、色々な不安を持っている。不安になると自己中心的になり、自分の事以外は考えられなくなる。

肺がんで入院していた恩師は、最後の講義で、「医療のオアシス」を作ろうといわれた。「患者さんは自分の活躍した世界から切り離されて、救いを求めてやってきた旅人である。その旅人がくつろげるオアシスを作ろう」と。博覧強記で有名な教授でしたが、いつも患者さんの話をとことん聞いて、途中で遮ることはなかった。

教授のいう医療のオアシスという言葉の響きには最新の機器や最高の医療技術を用いた医療よりも、常に患者さんの心を包み込む、不安の少ない医療というイメージがわく。

患者がくつろげる本当のオアシスは、市場原理で作られるものではなく、医療技術の進歩だけで解決できるものでもない。オアシスはどこかにあってそこに行けばよいというものではない。そこに集まる者の心の中にオアシスがある。今までのように科学者や技術者などによる理系のアプローチだけでなく、哲学、倫理学、経済学などの文系も含めた多角的なアプローチで解決を試みるべきである。もちろん目の前の患者さんに対応するのは我々である。



株式会社 大黒

本社：〒640-8525 和歌山県和歌山市手平 3-8-43

和歌山事業所	：〒641-0012 和歌山市紀三井寺855-71
紀三井寺事業所	：〒641-0014 和歌山市毛見 1111-1
大阪支店	：〒550-0002 大阪市西区江戸堀 3-5-27
南大阪支店	：〒594-0031 和泉市伏屋町2-16-11
紀南支店	：〒646-0011 田辺市新庄町3778-2
神戸支店	：〒650-0023 神戸市中央区栄町通5-2-6
奈良支店	：〒630-8115 奈良市大宮町4-295-10 奈良朝日生命川口ビル 1F
関西空港営業所	：〒590-0523 泉南市信達岡中919-1
新宮営業所	：〒647-0052 新宮市橋本 2-5-61
東京麹町オフィス	：〒102-0083 東京都千代田区麹町3-5-2 BUREX 麹町301号
京都丸太町オフィス	：〒606-8395 京都市左京区丸太町通川端東入 東丸太町32-3 上田ビル 3F

DAIKOKU MEDICAL SUPPLY

保健・医療・福祉の分野で、
「生命を守る人の環境づくり」を通じて
地域の発展に貢献することが
私達の使命です。

SEIKO MEDICAL
医療の先へ。セイコーメディカル株式会社

<p>■本社</p> <p>〒640-8527 和歌山県和歌山市手平3丁目9番地C10 TEL. 073-435-2333 FAX. 073-435-2223</p>	<p>■田辺営業所</p> <p>〒646-0011 田辺市新庄町2744番地 TEL. 0739-25-4535 FAX. 0739-25-4578</p>
<p>■大阪支店</p> <p>〒550-0012 大阪市北区中町2丁目5番28号 TEL. 0725-31-3610 FAX. 0725-31-3619</p>	<p>■新宮営業所</p> <p>〒647-0072 新宮市橋本2番22号 TEL. 0735-31-9130 FAX. 0735-31-9133</p>
<p>■大阪営業分室</p> <p>〒641-0012 和歌山県和歌山市紀三井寺768番地の13 TEL. 073-448-3787 FAX. 073-448-3781</p>	<p>■奈良営業所</p> <p>〒832-0082 天理市箕輪町58番地の4 TEL. 0743-64-3807 FAX. 0743-64-4810</p>

地域医療連携だより



榎本整形外科
榎本 晃芳



紀南病院を退職後開業してこの4月で10年となります。その間貴院には、紹介患者の受け入れを始め何から何までお世話になっております。特に救急の患者さんの紹介の場合、患者さんを目の前にしながら電話をかけていることが多いので受け入れOKとなったとき、患者さんと共に良かったですねーと喜んでます。感謝、感謝の毎日です。この場を借りまして御礼申し上げます。またこれからも多々ご迷惑をかけるとは思いますがよろしくお願いたします。

救急がらみでいうと昨年こんなことを経験しました。

息子が和歌山市の小学校へ通ってたので、私は約6年「逆」単身赴任をしています。その日は妻が医院の用事とハウスキープに田辺に戻ってました。午後1時ごろ昼食をとっていると息子の通う小学校から電話があり「息子がドッジボールをして他の子どもと接触して顔面を打撲した、養護教諭が休みなので迎えに来て欲しい」というのです。たまたまその日が水曜日で午後休診、かつ会議等も無かったので私も一緒に和歌山へ行くことにしました。車の中では、行ったら既に良くなって走り回ってるんちゃうとか両親が揃って迎えにいったら親バカと思われるかななどとへらへら会話してました。



ところが約2時間後学校へ着き保健室へ入って息子の姿を見て驚きました。これ以上無いくらい顔面から血の気が引いていて声をかけても「ウーン痛いー」とかいうのみです。左目の下に皮下出血と圧痛があり眼球運動を確認してもハッキリしません。極め付きは少し頭を動かすと大量に嘔吐しました。2時間以上この状態でいさせたことに罪の意識を感じながら、少なくとも頭部顔面のCTと脳外科、眼科等の診察をと考え、学校の先生に近くの総合病院の救急に関い合わせてもらうと今診察できないので他へ行ってくださいとの返事。がくっとなって次は私が別の総合病院へ問い合わせるとあっさり受け入れてくれました。(勿論私が医師だとは名乗っていません)それだけでその病院に一生ついていきますという気持ちになりました。

病院では息子は救急室の中へ入ったきりでこちらはただ待つのみです。行きかうスタッフ全員がドクターやナースに見え、息子のことを言っているのかと不安で何でもない会話に聞き耳をたててしまい、〇〇さんと呼ばれると我々のことかとドキッとしてそちらを見てしまいます。日頃、患者さんもこんな不安な気持ちで受診されているんだろーなーとあらためて感じた次第です。

幸い、息子は眼窩底骨折はあったものの特に処置は必要なく二日後には登校できました。お世話になった方々へ感謝、感謝です。

余談ですが最初に断られた病院は実は私の母校の付属病院でありまして、「将来、息子にあの学校は絶対受験させない」と妻がいきまいていました。「逆に向こうから断られるんちゃう」と冗談を言おうとしましたが、妻の目がマジだったのでやめときました。

以上とりとめのない文章になってしまい申し訳ありません。

最後になりましたが紀南病院のますますの発展をこころより祈っています。

看護学校だより

平成23年1月11日(火)に第34回生のケーススタディの発表会が行われました。臨地実習で受け持たせていただいた患者様への看護を振り返り、看護実践の結果を評価・考察し、自己の看護観を深める機会となりました。紀南病院、紀南こころの医療センターより看護師長、看護師の皆様にご出席いただきご講評を頂きました。

前期入学試験

平成23年1月20、21日に前期入学試験が行われました。なお、後期入学試験は3月16、17日に行います。

今後の学校の行事予定ですが、3月4日(金)に、第34回生の卒業式を開催いたします。

1月17日、視覚障害者福祉事業である社会福祉法人日本ライトハウスに学校祭の売り上げ金81,473円を紀伊民報を通じて寄付しました。紀伊民報には、1月23日に記事が掲載されました。



病院のまど

去る1月28日に当院の中村正作初代名誉院長が、ご逝去なされました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

第29回市民健康講座について

手足や顔がむくんでしまうことはありませんか？このむくみ、水分や塩分を取りすぎたときに一時的に起こることもありますが、なかには腎臓や心臓など内臓の病気が原因で起こることもあります。この機会に「むくみ」について、その原因や治療法について一緒に勉強してみませんか？

日 時 平成23年3月13日(日)
時 間 午後2:00~3:00
演 題 浮腫 ~知っておきたいむくみの原因と治療~
演 者 山本 忠生 (紀南病院 病院長)
会 場 紀南病院 3階講堂

がん緩和ケア講演会



緩和ケアにおける身体症状マネジメントについて、当院麻酔科部長内藤京子が講演を行いました。

緩和ケアにおける疼痛管理については皆様の関心が高く、食い入るように説明を聞いておられました。特にオピオイドの早期処方に話が及んだときは、身を乗り出すようにして聞かれる方もいらっしゃいました。

土曜日にも関わらず、地域の医療関係者の方々が参加され、有意義な講演会でした。

第28回市民健康講座について

平成23年1月30日(日)に「家庭でできる感染対策」と題しまして、感染管理認定看護師中本千秋が講演をしました。インフルエンザが流行ってきてつつあるこの季節、皆様非常に関心が高く、活発な質疑応答がなされ、ご理解を深められていらっしゃいました。

手話特訓中

患者サービスの向上のため、現在20名の職員が手話の研修を受講中です。

挨拶から始まり、簡単な日常会話ができるレベルまでの手話を身につけることを目標にしています。

手話で簡単な日常会話をできる職員が増えることで、手話を話される方にとりましても優しい病院となれるよう取り組んでいきたいと思っております。

基本理念

私たちは、患者さまに優しさをもって接し、皆様から信頼される医療を目指します。

紀南こころの医療センター

やさしさをもって、信頼と満足の得られる医療を行います。

社会保険紀南病院
〒646-8588 和歌山県田辺市新庄町 46-70
Tel 0739-22-5000 Fax 0739-26-0925
<http://www.kinan-hp.or.jp>

編集後記

平成22年は、病院機能評価V.6を取得することを目標に職員全員が心ひとつとなり一致団結？をしてきました。環境にも気を使い、院内の整理整頓に努めました。

そして、10月に機能評価の受審が終わり、3ヶ月が経ち、環境整理はどうでしょうか？少しずつ崩れはじめているのではないのでしょうか？

“継続は力なり”とよく言われますが努力することを忘れずにいたいものです。

3月号が発刊される頃には、よい受審結果も出ていることを期待したいと思います。

“毎日少しずつ、それがなかなかできねんだなあ”—相田みつを—
I. N